



アリは、アブラムシから甘い汁をもらう代わりに、テントウムシなどの天敵から守る。だが、アリと共生関係にあるカイガラムシに擬態したコクロヒメテントウの白い幼虫が、アブラムシを狙っている

アブラムシなどが多発しやすくなる。でも土さえあれば、ミスやダンゴムシをはじめ土づくりに欠かせない生き物や、その土地に適した土壌微生物が、植物に必要な栄養を勝手につくってくれる。化学肥料がないと植物は育たない、という思い込みから、まずはいったん離れてみ

な。花が楽しめるのは園芸植物だけではない。ナスやオクラ、ジャガイモにトマトなど、野菜の花もかれん。近ごろはバックホの野菜しか知らない人も多いが、どんな花か

能性もあることを存じだろつか。新しもの好きの園芸愛好家が、病虫害を増やしている面もあるのだ。さらに、コンパニオン

**今日は石窯パンノ  
タカキベーカーリー**

ら実になり、私たちの口に入るのかを知ることにも、オーガニックな暮らしのための第一歩としよう。さらに、コンパニオン植物)を利用してみるのもおもしろい。バンカープランツとは、「bank II お金をためる」という意味から転じて、天敵を蓄えることから名付けられた。

例えば、アブラムシの発生しやすいヨモギを抜かずにおくと、天敵のテントウムシをたくさん呼び込める。植物の種類によって違うアブラムシがつくが、テントウムシはどんなアブラムシでも食べる。

生態系を利用したこんな方法も、オーガニックガーデンの醍醐味といえる。

(オーガニックガーデン  
プランナー)

◆月1回掲載します

# 虫退治生態系生かして

オーガニックのすずめ  
# # # ガーデンのすずめ  
曳地 トシ

せっかく草花を植えるなら、化学肥料を使わないで、今そこにある土だけで育ててみよう。化学肥料は、植物の成長に必要な窒素、リン酸、カリなどを硫酸や硝酸、塩酸などと化合させたものが多く、土を酸化させ、ミミズなどの土壌生物にダメージを与える。その上、栄養分が増えすぎて、次々と新しい草花を移入すると、日本になかった病虫害が入り込み、生態系のバランスを崩す可

てはどうだろう。

園芸店の店頭に並ぶ見慣れない新しい花も魅力的だが、病虫害に耐えて生き延びてきた在来種のほうが、自然の力を生かした管理には向いている。



ナスにアブラムシがつかないように、バンカープランツとして、アブラムシが発生しやすいムギを植える。そうすればアブラムシの天敵テントウムシがたくさんやってきて…(イラスト・曳地義治)



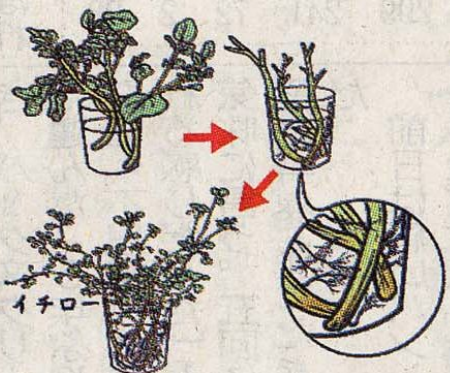
## 生活メモ



▽クレソンの活用法  
先端部分をステークのつまに、摘み取った葉をサラダなどに使うクレソン。では、残った茎は？

グラスに挿して、茎の下半分くらいまで水を張ります。うまくいけば数日後、水に漬かった茎の節々から白い根が生え、摘み取った

葉の付け根からは新芽が出てくるはず。芽が程よく成長した



ら、冷ややっこや汁物の青みなどに利用しましょう。グラスの水を小まめに換えるのが、上手に育てることです。

そんな暇はないという場合は、茎をさつとゆでて細かく刻み、炊きたてのご飯にまぜます。淡い辛味、野生の香り、美しい緑色のクレソンライスもいいですよ。

## 本棚



「漬ける・干す・保存する」

濱田美里の

季節の手仕事帖」

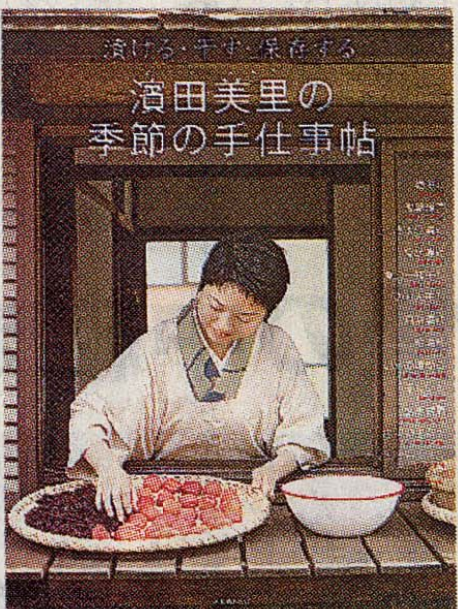
梅干しやぬか漬けを作りたくても、手間を考えると尻込みしていませんか。一人暮らしのアパートでも、台所さえあれば作ることができる保存食のレシピ集

だ。

梅雨時の作業となる梅干しにラッキョウの甘酢漬。初夏には赤ジソジュース。秋は干し柿、アジヤサンマの

干物。冬はリンゴの皮でアップルティー…。

著者は呉市下蒲刈町生まれ。日本各地のおばあちゃんから保存食作りを教わった。四季



折々の写真で、その喜びもおすそ分けしてくれる。

(河出書房新社・一五七五円)



# 私の口福

山里がおもしろい

前田 万里子

⑦

## 摘果や袋掛け 精魂込め

### リンゴ栽培

五月から六月にかけて、この山里にはリンゴの花が一斉に開く。淡いピンクがかった白く可憐なリンゴの花！ 広島県でリンゴの花を間近に見ることはなかなかできないのではないかなと思う。私もこの土地に嫁ぐまで、広島島の地でリンゴが栽培できると夢にも知らなかったのだから…。

標高五百級、朝夕の気温の差が激しく、季節の寒暖差が大きい地方ならではのリンゴ栽培。昭和初期、先人によって導入されたリンゴの木が、今では県内一の産地としてその名を知らしめている。山里ゆえの、自然の厳しさゆえの特産品といえるだろう。

「リンゴの花を見たくてやってきたんよ」「リンゴの花ってとつてもかわいいね」「リンゴ園で記念写真を撮ってきたよ」などなど、お客様の笑顔はどれも幸せそうだ。「エーわざわざリンゴの花を見に？」と、対応



イラスト・ありか

する私のほうが感動してしまふ。ま、無理もないか。三十数年前、私自身もその可憐な花々に感動した一人なのだから。

夫が元氣だった頃、わが家もリンゴ農家だった。人一倍真面目な夫が精魂こめて栽培していたリンゴは、多くの人から愛され注文に追いつかない状況だった。その栽培管理はとてつもなく、きれいに咲き誇る花々を摘み、良い実を付けるためにさらに摘果していく気の遠くなるような作業、そして小さな実を袋掛け。それは食するものにはとても分かり得ない苦労がいっぱいなのだ。

そんなリンゴの花咲く土地と作り手を見てもらいたくて、「リンゴの花見ツアー」を企画。思いついたら即実行主義の私のこと、新聞記事だけでバス一台の希望者を集客した。日帰りの短時間の中だったが、リンゴ栽培の一端を垣間見た参加者は「来年も来たい」と大感激。「今度からは高野リンゴを買いたい」とうれいお言葉。

顔の見える消費者との距離の大切さをあらためて感じた企画に万歳！  
（田舎レストラン「りんご畑」代表 庄原市）

4

くらし 食・エト

ごま

野の花

ある日、書店に立ち寄って花の本を探しているとき、優しく品のある女性の写真が目に入った。広々とした草原の中で動物たちや花々と自然に溶け込んでいる。それは、まるで田舎で長い間、農業をしてきた八十六歳になる母のように思えた。

母は朝から晩まで野良仕事に追われ、寝る間も惜しんで働いた。細くやせた体をせつせと動かし、どんなに忙しくても、どんなに苦しくても愚痴をこぼさなかった。そんな母の頑張る姿を見て、子ども心に「すごい」と思った。

広島市佐伯区

主婦 海浜 千鶴子 62歳

そして、どんなときも、いつも家のどこかの花瓶に野の花をさりげなく生けていた。その母の姿が、写真の女性と重なった。私は六十歳で仕事を終えた。自由な時間ができた今、この本との出会いが元気を与えてくれた。思い切って和風の庭を洋風に替え、れんがを運び、芝を植え、自分流のガーデンングに取りかかった。

大好きなバラの花やハーブ、野菜を植え、狭い庭が草花でいっぱいになった。それを前にして、また写真の女性を思い出した。その人は、アメリカの絵本作家、園芸家として世界的に知られたターシャ・テューダーさん。先日、九十二歳で亡くなった。自然との調和を大切にしている世界は、わが家の庭で、しっかりと生きている。